高知県立文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol. 77

▲司馬さんが取材に訪れた昭和30年代のはりまや橋（画像提供／山﨑修一氏）

リレー随筆

土佐のにおいと空気のなかで――

上村　洋行

司馬遼太郎は土佐、土佐人のことにずいぶんの関心を持っていた。時に故郷のように感じるとも言い、その風土、人々の気質、土佐の言葉……といったことから日本の国のかたち、日本人を考える基盤のひとつにしていた。

その考えたことなどは小説やエッセイになって残っている。小説は長編だけでも坂本竜馬をとりあげた『竜馬がゆく』、長曾我部元親の生涯を描く『夏草の賦』、山内一豊と千代の『功名が辻』、山内容堂の『酔って候』と多く、エッセイにいたっては『司馬遼太郎が考えたこと』などに収録されている数はかなりにのぼり、『街道をゆく』では14巻の「南伊予・西土佐の道」27巻の「檮原街道」の2回にわたって書いている。

「当時、土佐人のにおいというものがまだ残っていた」と、昭和32、33年のころに高知を訪れたときの話を、私が学生の頃に話してくれたことがある。

播磨屋橋のたもとだったか、喫茶店のようなところからガラス越しに道行く人を3時間近く眺めていたという。通行の人々が、長曾我部氏の戦国時代、平時は農業で事が起これば具足をそろえてはせ参じて闘う一領具足に見え、幕末の脱藩する志士、あるいは自由民権の運動家らを連想させる自由な野のにおいを感じたという。このことはのち、エッセイでも書いていた記憶がある。まだ『竜馬がゆく』の執筆を始めていないころのことである。

私もこの街を何度も訪れ、晴雨寒暖に関わらず、いつも明るい気分になることに驚く。司馬作品の影響もあるが、土地全体に漂う空気（文化）が、そう発信しているのだろう。

この4月から高知県立文学館で「司馬遼太郎展―21世紀〝未来の街角〟で」がはじまる。「二十一世紀に生きる君たちへ」という文章から引いて会場を〝未来の街角〟と想定。司馬作品を戦国、幕末、21世紀の3つに分け、高知に関連する作品も含めて展開する。

人間とは、日本人とは、日本国とは……を考え続け、作品に表した作家のメッセージが、自筆原稿、歴史資料や図解などから伝わるように構成した。合わせて思考の断片とも言える言葉の数々が会場にあふれている。

この〝未来の街角〟から発せられるいくつものメッセージを受け取ってほしい。司馬遼太郎というひとりの小説家とその作品に出会い、これからの時代をどうとらえればいいのか、ご自身の立場に立って、ご自由に「感じる」「考える」時間をほんの少し持ってもらえたら、と願っている。

それも土佐のにおいと空気の中で――。

（司馬遼太郎記念館館長）

展覧会紹介 Exhibition

開館20周年特別企画

没後20年 司馬遼太郎展「21世紀〝未来の街角〟で」

平成29年
4月1日(土)
▼
5月25日(木)
企画展示室

観覧料500円

司馬さんに あう。本に あう。

〝あなたが今歩いている、二十一世紀とは、どんな世の中でしょう〟

小学生に向けて書かれた『二十一世紀に生きる君たちへ』の中で、司馬遼太郎さんは、こう問いかけています。

司馬さんが亡くなって、今年で21年を迎えました。彼は、72年の生涯で、『竜馬がゆく』『坂の上の雲』など40篇を超える長篇小説やエッセーや評論など数多くの作品を残しました。

それらの作品は、いずれも版を重ね、時に映画やテレビで映像化され、世代を超えて読み継がれながら、混迷の時代という現代に生きる私たちの道しるべともなっています。

これほど長く愛されるのはなぜかと考えたとき、司馬作品には、物語としてのおもしろさだけでなく、時代を超えて色あせない強いメッセージ性があるからだと気付くでしょう。

初期作品を執筆した文机／司馬遼太郎記念館所蔵

今回の企画展では、司馬作品からのメッセージを感じ取る空間「未来の街角」を高知県立文学館に創り出します。司馬遼太郎さんが次世代を担う子どもたちに遺した『二十一世紀に生きる君たちへ』に通じる街角です。

司馬さんは大阪生まれ。産経新聞大阪本社の新聞記者だったころ、「ペルシャの幻術師」などの小説を発表し、文化部デスク時代には『梟(ふくろう)の城』で第42回直木賞を受賞。昭和36年になると、新聞記者を辞して作家としての道を歩み始めました。

『風神の門』など忍者を主人公に据えた小説から、幕末の風雲児・坂本龍馬を中心に志士たちの青春群像を描いた『竜馬がゆく』、一介の油売りから美濃一国の主となった〝蝮の道三〟こと斎藤道三とその革新性を受け継いだ娘婿・織田信長を描く『国盗り物語』といった歴史小説へと作品は移っていきます。

綿密な資料考証と、その場にいたかのようなリアリティーある語り口は、多くの読者を魅了し、歴史に埋もれていたヒーローを次々と世に送り出しました。

そして、後年には、歴史を基軸に文明や日本人について思索した『この国のかたち』や『街道をゆく』などのエッセーを数多く書いています。

橋原神楽『街道をゆく』より／須田剋太画

歴史を経糸(たていと)に、日本の豊かな地域性と文化を緯糸(よこいと)に織りなす珠玉の作品は、今も決して色あせることなく、私たちの心に語りかけてきます。

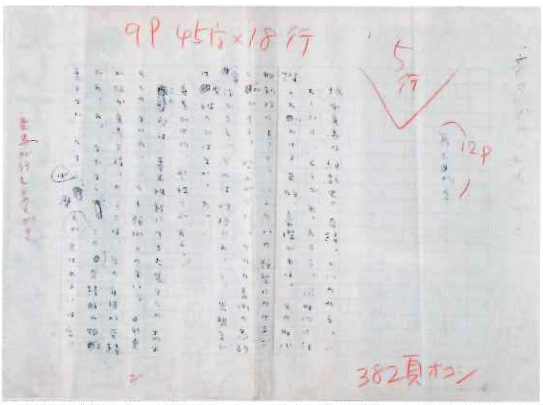
展覧会紹介 Exhibition

開館20周年特別企画

没後20年 司馬遼太郎展「21世紀"未来の街角"で」

平成29年
4月1日(土)
▼
5月25日(木)
企画展示室

観覧料500円



「竜馬がゆく」単行本あとがき／司馬遼太郎記念館所蔵

本展では、戦国時代に躍動する人々の生き方から歴史を描く「16世紀の街角」、有名無名の人を通して近代国家へと大きくうねる時代を俯瞰する「19世紀の街角」、歴史と風土を踏まえつつ日本という国のあり方を標榜した「21世紀の街角」――の3部構成とし、"未来の街角"へと来館者を誘います。

新聞記者時代の珍しい資料も含め、貴重な自筆原稿や挿絵、関連する歴史資料などから、司馬遼太郎さんの遺したメッセージを皆さんが体感し、何かを考え、行動するきっかけになれば幸いです。

ここにくれば"司馬さんに会える、作品に出会える"。（学芸課長／津田加須子）

◆関連企画のご案内◆

■ティーチャーズデー　学校の先生を対象に司馬遼太郎作品の魅力を体験。

・日　時：4月15日(土) 午前11時～12時
・場　所：高知県立文学館茶室「慶雲庵」および展示室
・定　員：30名ほど（学校を通して、電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）

■司馬作品映画上映会

☆「御法度」
・日　時：4月16日(日) 午後2時～4時

☆「暗殺」
・日　時：5月7日(日) 午後2時～4時
・場　所：両日とも高知県立文学館1Fホール
・定　員：各50名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）
・参加費：両日とも参加には当日観覧券が必要です。

■文学散歩　司馬遼太郎作品から～長宗我部・山内ゆかりの地を訪ねる文学散歩です。

・日　時：4月27日(木) 午前10時～
・定　員：40名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）
・参加費：3,000円（昼食代、観覧料込）
※5月14日（日）の文学散歩は定員に達しました。

■木洩れ日コンサート　司馬遼太郎の世界を旅する～「坂の上の雲」よりスタンド・アローンほか

・日　時：4月30日(日) 午後2時～3時
・場　所：藤並の森　文学館前（雨天時は高知県立文学館1Fホール）
・演　奏：ヴァイオリン　川村陽華（音の文化振興会協力）
・定　員：なし（申し込み不要。当日会場へお越しください。）
・参加費：無料

■朗読の会　文学館カルチャーサポーターによる司馬作品の朗読

・日　時：5月20日(土) 午後2時～4時
・場　所：高知県立文学館1Fホール
・定　員：なし（申し込み不要。当日会場へお越しください。）
・参加費：無料

他にも多彩な関連企画を用意してお待ちしています。

☆展示解説

展覧会担当者による展示解説を行います。

毎週土曜日

各日とも午後1時半～（約20分）
参加には当日観覧券が必要です。

文学館の常設展が変わります！

来館のたびに新しい発見があると好評の〈変わる常設展示〉。今年度は4人の作家の入れ替えを予定しています。

展示は 5月下旬 を予定！

●「自由民権運動と文学」コーナー 宮崎夢柳を中江兆民へ入れ替え

ルソーの民権思想を日本へ紹介し、「東洋のルソー」とも呼ばれた、明治日本の独創的な思想家・中江兆民。最近直筆原稿が発見されて話題になった『三酔人経綸問答』を中心に、文学的価値も高い兆民の業績をご紹介します。

見どころ…
中江兆民書色紙、『維氏美学』、『三酔人経綸問答』ほか

▲中江兆民書色紙

展示は 5月下旬 を予定！

●「反骨の大衆文学」コーナー 森下雨村を田岡典夫へ入れ替え

田岡嶺雲の甥で、土佐の風土と土佐人の心の機微を描き続けた直木賞作家・田岡典夫をご紹介。代表作の『小説野中兼山』や、幕末の土佐の武士たちの世界を描いた『武辺土佐物語』などの作品を中心にご紹介します。

見どころ…
田岡典夫草稿「小説野中兼山」、帽子ほか

▲田岡典夫(昭和26年夏か)

展示は 4月下旬 を予定！

●「現代の文学」コーナー 清岡卓行を田宮虎彦へ入れ替え

芥川賞候補になるも、芥川賞を越えた作家と評され受賞が見送られたという逸話を持つ作家・田宮虎彦。代表作『足摺岬』や、会津藩をモデルにした黒菅藩を描いた『落城』など、暗い体験を越えた清冽な叙情を持つ諸名作をご紹介します。

見どころ…
田宮虎彦草稿「歴史小説と史傳」、愛用の文鎮、眼鏡ほか

▲田宮虎彦愛用の品々

展示は 5月下旬 を予定！

●「近現代の詩歌」コーナー 橋田東声を若尾瀾水へ入れ替え

正岡子規没後に発表した「子規子の死」を批判され、俳壇から排斥された若尾瀾水は、信ずることを一筋に貫いた土佐の文人でもありました。彗星の如く駆け抜けた大学時代と、帰郷後に取り組んだ、中山高陽などの土佐文人研究を紹介します。

見どころ…
若尾瀾水色紙、若尾瀾水画画帳ほか

▲若尾瀾水色紙

館長室から

花に十日の紅なし

元吉　喜志男

このたび、3月末をもって高知県立文学館を辞することになりました。この「館長室から」への執筆も今回が最後となります。

文学館とのお別れの日が近づくにつれ、展覧会や教育普及活動などを通じて、喜怒哀楽を共にしてきた館のスタッフや色々な立場から文学館を支えていただいた人たちとのあの日、あの時のシーンが深い感謝の気持ちとともに蘇ってきます。

ふと、学生時代に書物の中で接したT・Y先生が色紙に書かれた「冬枯れの多摩の川原に居つくして　入日ながむる我身となれり」の言葉が心のどこかに重なったりもします。

しかし、「花に十日の紅なし」という言葉もあるように、文学館を取り巻く時代の潮流を思えば、お客様に感動を提供し続けられる館づくりのためには、発想がマンネリ化することなく時代ニーズに応えられる清新な風を吹き込むことも必要です。

思えば、赴任して一ヶ月位を経た頃に、平成21年6月発行の「藤並の森」(VOL.45)に「芸術の命と文学館」と題して書いた座右の銘を手がかりに八年間に及ぶ館長職でした。

様々なデータなどから「いま、文学館に求められているものは…?」と考えながら、「見せる文学館から魅せる文学館へ」をテーマに過ごしてきた館とも、この季刊誌がお手元に届く頃にはお別れです。お世話になった方々に心から厚くお礼申し上げます。

「文芸は実人生の地理歴史」という言葉のとおり、時空を超えた古今東西の文学の世界に触れることは、世代を超えて多くの人たちの心の宝物になろうかと思われます。

高知県立文学館は、今年11月に開館20周年を迎えます。新たな歩みを始める文学館に対し、今後とも変わらぬご厚誼をお願い致します。

◆平成29年度の常設展 企画コーナーでは「しおりちゃんと学ぼう！ 土佐近世文人展 ～南学と詩歌の世界～」をご紹介します。

■期　間　平成29年 4月1日(土)～平成30年 3月21日(水・祝)
■休館日　6月26日(月)～6月30日(金)(メンテナンス休館)、12月27日～1月1日（年末年始のため休館）
■場　所　高知県立文学館２階　常設展企画コーナー

大政奉還から150年後となる2017年は、「南学」の礎（いしずえ）を築いた谷時中の生誕420年、明治維新から150年後となる2018年は、「南学」を復興させた谷秦山の没後300年の記念の年です。

本コーナーでは、幕末維新で多くの人々が活躍する礎ともなった土佐独特の思想「南学」と、土佐近世文人たちの詩歌から、当時の人々の心に近づいていきたいと思います。

1. 土佐と南学

海南朱子学（南学）は土佐独特の学問で、朱子学の解釈だけではなく、日本の文化や精神のありようを学ぶ「国学」的な要素を含み、また身分によってその人のふみ行なうべき正しい道である「義理名分（ぎりめいぶん）」と、実際にそれを行なう「実践」を大切にしたもので、尊王思想（そんのうしそう）にも通じるものです。古書籍などの貴重な資料と共に、土佐南学の歴史をご紹介します。

2. 歌う近世文人

古代中国では、士大夫という身分にあって、「学問を修め、文章を能（よ）くする人」を「文人」と呼びました。

私たち土佐の地にも、文人を理想とした人は多くいました。近世の人々にとって、教養として学問を身につけ、詩文や画を書くということは、とても大切なことでした。

大切に残された掛け軸や短冊などに書かれた、彼らの詩歌を紹介します。

資料を通して、土佐で育まれた南学と、土佐近世文人たちの広やかな詩歌の世界を読みながら、そこに確かに在った、土佐の人たちの心に思いをはせていただければ幸いです。

（学芸課／川島禎子）

▲展示の様子

オリジナル・グッズができました！

時間を忘れて楽しめる、文学館ミュージアムショップに、新しいオリジナル・グッズができました。

企画展にあわせて誕生した可愛い一筆箋、ブックカバー、しおり、ポストカードです。

文学館来館記念として、またご家族・お友だちへのお土産としてもお薦めです。

土佐れきぶん散歩　登場！

3月4日から始まった「志国高知 幕末維新博」との連携事業として当館が作製した、歴史と文学にふれる、まち歩きマップです。

やさしい解説と柔らかなデザインに仕上がりました。高知市内の各施設や高知駅前の“とさてらす”等でも配布していますので、ぜひ歴史と文学にふれあいながら、お城下の散策をお楽しみください。

文学館茶室「慶雲庵」改修終わりました！

昨年12月から、皆様にご迷惑をおかけしていました茶室改修の工事も終わり、綺麗になったお部屋を利用していただけるようになりました。

ご利用の皆様からは「綺麗になったね」と大変喜んでいただいています。

土佐文学さんぽ 76

消えていく方言 ―土佐のトウクロウ―

猪野 睦

以前といっても30年くらい前だったろうか。手結、岸本あたりでは、すこしもたもたしていると、トウクロウが、という声のとぶのをきいた。年輩者から若者への叱声でもあったろうか。しゃんとせよという決断力うながしにも聞こえた。

村ではしゃんとしていなければ一人前でなかった時代、段どりが悪かったり、とろとろしていると邪魔になる。土佐言葉でいう〝まぎる〟〝のいちょれ〟という意味で使われた。

トウクロウは藤九郎、あほうどり、信天翁のことで無人島でのんびり集団で暮している鳥である。井伏鱒二の「ジョン万次郎漂流記」にもでてくる。土佐沖を流され絶海の孤島に台風などで流れつく。喰物はない。毎日島でのんびり、とろとろしているトウクロウを叩き殺してくい、生命をつながねばならない。

◀現在の手結港の様子

岸本にはそのジョン万次郎よりも早く漂流し、孤島で生きのび13年ぶりに生還できた野村長平がいた。むろん土佐沖にはトウクロウ、アホードリはいない。その長平の語る南海孤島のアホードリは、地域でその鈍なさまが語られ、決断のつきにくい若者への叱声にもなったのではあるまいか。

「高知県方言辞典」には「とうくろう」あほうどりとある。近世の方言をあつめ安政四年に江戸ででた「物類呼稱」は、当時の全国方言辞典ともいうべきものであり、「土佐国にて、とうくらうと呼」がでてくる。「物類呼稱」は江戸で出版されているから「とうくらう」は土佐の呼び方として、近世から通用していたろう。

安政十年正月、13年ぶりに岸本へ帰りついた長平のうわさは、長平が喰ったというトウクロウという名とともに拡がったのではあるまいか。そこから殺されるしか能のない鳥、アホードリ、いつのまにか能無し男の別稱として使われてきたのではあるまいか。

いまでは、ほとんど聞くこともないが、若い衆をトウクロウが、と呼んでいた男を思いおこした。その男も、年輩者がトウクロウが、と言っていた言葉を聞いて育った一人ではなかったろうか。おそらく今では消えていっている言葉だろうが、なんとなくほほえましい。

ついでにいえば「物類呼稱」のシイラをトウヤク、クマビキ、サメをフカは今も土佐では生きている。フカのゆで切身を日曜市で買う年輩者もまれにみかけた。スミソで喰べるということだったが、伝統食だったろうか。

（詩人）

資料受贈報告

―寄贈資料から―

小山いと子 直木賞授賞式写真

1950（昭和25）年9月19日
撮影者不詳
西村 淳氏寄贈

上部写真／左から直木賞選考委員の久米正雄、直木賞同時受賞の小山いと子、今日出海、芥川賞受賞の辻 亮一。

小山いと子（1901－1989）は高知市生まれの作家。1933（昭和8）年、小説「海門橋」で文壇にデビュー。以後、綿密な調査に基づく佳作を次々と発表し、1950（昭和25）年、「執行猶予」で第23回直木賞を受賞。右の資料は、その授賞式の写真です。

小山は1939（昭和14）年に「4A格」が芥川賞候補となるなど、自他ともに認める純文学作家で、直木賞受賞は世間にとっても小山にとっても意外なものでした。しかし小山は『直木賞作品集（1）』（1956年 大日本雄弁会講談社刊）のあとがきで、「小説というものは面白くなければならぬものであって、面白くない小説が高級な純文学小説であるといった風の、日本の変な文壇常識に賛成出来ないでいたので受賞はうれしかった」と述べています。

寄贈者・西村淳氏は、小山いと子のご令孫。昨年、当館の展示をご覧になって、整理を進めておられた遺品の寄贈をご提案くださり、今回ご紹介した資料をはじめ、多数の写真資料の他、長編小説「男対女」の原稿等をご寄贈いただきました。右の資料を含む多くの写真資料は、劣化の進むプリントをデータ化して残されたもので、惜しくも原版は現存しませんが、小山の足跡を示す貴重な資料群です。造船所での取材風景や著書の英訳出版を契機とする渡米時の写真等、状態の良い写真は原版もご寄贈いただいており、原稿類とともに今後展示でもご覧いただけるよう、整理と調査を進めていきたいと考えています。

（学芸課／小松路代）

受贈報告（平成28年12月～平成29年2月）敬称略

▼**多田耕一**・「寺田 紳関係資料」
▼**吉村千穎**・「大原富枝書簡」他
▼**祥伝社**・「冬の野 橋廻り同心・平七郎 控 藤原緋沙子著 祥伝社刊」
▼**食野雅子**・「マジック・ツリーハウス41 走れ犬ぞり、命を救え！ 食野雅子訳 メアリー・ポープ・オズボーン著 KADOKAWA刊」
▼**東原伸明 ヨース・ジョエル**・「土左日記のコペルニクス的転回 東原伸明 ヨース・ジョエル編著 武蔵野書院刊」
▼**岡崎桜雲**・「句集 墨縁 岡崎桜雲著 文學の森刊」
▼**松林朝蒼**・「句集 夏木 松林朝蒼著 文學の森刊」
▼**林 亮**・「句集 高遠 林 亮著刊」
▼**小松弘愛**・「現代生活語詩集 2016 喜・怒・哀・楽 全国生活語詩の会編 竹林館刊」
▼**國友 積**・「詩集 生命のスケッチ 國友 積著 ONL刊」他
▼**楠瀬勉久**・「詩集 SHORT STORY POEMS 晩秋は 根津真介著刊」他
▼**高知ペンクラブ**・「戦後70年 それぞれの思い―88人が寄せた人生の記録― 『戦後70年 それぞれの思い』編集委員会編 高知ペンクラブ刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

展覧会報告！

犬、猫、作家。
～作家とペットの素敵な関係～

3月20日(月・祝)に「犬、猫、作家。～作家とペットの素敵な関係～」が閉幕しました。

大原富枝さんや安岡章太郎さんなど、当館の顕彰作家のなかでも犬や猫を家族同様に愛し、執筆に向き合う時の心の安らぎにしてきた人たちがいます。

彼らがどのように犬や猫とつきあい、作品に登場させてきたのか。ご遺族や関係者にご協力いただき、犬や猫に対して柔かな表情を見せる写真や、ほほえましいエピソード、原稿や愛用品などを展示し、いつもとは違った角度で作家の魅力をご紹介することができました。

その他、会場では、犬・猫の歴史と豆知識、県の食品・衛生課よりお借りした動物愛護の啓発パネルや、高知県立歴史民俗資料館からお借りした貴重な郷土玩具の展示、あわせて、猫の目線で近隣の文学碑を楽しく紹介するオリジナル映像コーナー「高知ぶんがく猫あるき」や、職員手書きの「わんにゃん新聞」、職員手作りのネコミミ・ネコしっぽをつけて写真が撮れるコーナーなども展開。来館されたお客様からは「犬や猫の意外な歴史が分かって面白かった」「作家の作品に興味が出たので読んでみたい」「幸せな空間だった」などの嬉しいお声をたくさんいただくことが出来ました。

会期中には「カツオにゃんこ」や「にゅーすけ」といった犬・猫をモチーフにした地元の〝ゆるキャラ〟も来館してくれ、お客様を楽しませてくれました。

関連イベントも、海洋堂ホビー館四万十と安芸市ワークセンターの皆さまにご協力いただいた「素焼きニャンぬりえ」をはじめ、ペットのキーホルダー作り、映画上映会、ティーチャーズデーなどを開催。可愛いオリジナルグッズも誕生するなど、さまざまな形で作家とペットの素敵な関係をご紹介することが出来ました。

これからも、高知の宝を保管し、地域の皆様に愛される文学館として、多彩なアプローチでわかりやすく文学の楽しさをお伝えしたいと思います。本展の開催に際しまして、ご遺族・関係者の皆さまをはじめ、多大なるご協力をいただきました関係各位に対し、心よりお礼を申し上げます。(学芸課／福冨陽子)

▶展示の様子

▶ゆるキャラ「カツオにゃんこ」も遊びに来てくれました！

▶「素焼きニャンぬりえ」など多彩な関連イベントも開催！

館長就任に寄せて

お城の北東、緑豊かなこんもりとした森の中に文学館は静かなたたずまいを見せている。

今年は、南国らしい明るい日差しの下、高知城歴史博物館の開館とともに「志国高知幕末維新博」が開催され、この界隈は、県内外からの観光客で例年以上ににぎわいを見せている。

先日、この森を散策してみた。

多くの観光客が主役だったが、高校生や、お年寄り、親子連れもそれぞれのスタイルで、ゆったりとした時間を楽しんでいた。

多くの県民の憩いの場である「藤並の森」は、昔と変わらず。

「人生は短く、芸術は長し」との古人の言葉がある。

この4月から、文学という言葉の芸術・文化にかかわることになった。

人々の日々の営みを言葉でつむぐということに畏怖を覚えつつ、春爛漫の日差しの中にたたずむ毎日である。

岡﨑　順子

人事異動

【退職】

文学館館長　元吉　喜志男
文学館事業課　田中　智子

【新任】

文学館館長　岡﨑　順子

【転入】

新所属　旧所属
文学館学芸課　歴史民俗資料館　道脇　夕加
文学館事業課　文化財団総務部　篠川　佳子

高知県立文学館ニュース 第77号 平成29年4月1日発行 〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1番20号 電話088-822-0231 FAX088-871-7857

企画展年間案内

※企画展の観覧料には常設展の観覧料も含まれています。

4月～5月

高知県立文学館 開館20周年特別企画

没後20年 司馬遼太郎展 －21世紀"未来の街角"で

2017(平成29年) 4/1(土)～5/25(木) 場所：企画展示室 観覧料：500円

展覧会の紹介をしています！この館報の表紙・2ページ・3ページをご覧ください。

没後20年 司馬遼太郎展
「21世紀"未来の街角"で」

6月

東京写真月間「青春18きっぷ」ポスター紀行

2017(平成29年) 6/3(土)～6/25(日) 場所：企画展示室 観覧料：無料（※常設展は別途料金）

日本写真協会が行う「写真の日」記念企画である、国内写真家による作品の巡回展。写真家達が力強く捉えた風景とともに、「青春18きっぷ」ポスターの25年間の軌跡をたどります。

メンテナンスのため6/26(月)～6/30(金)まで臨時休館いたします

7月～9月

いいから いいから ～長谷川義史の世界展～

2017(平成29年) 7/8(土)～9/10(日) 場所：企画展示室 観覧料：500円

ダイナミックな筆致とユーモアあふれる言葉で、子どもから大人まで魅了している長谷川義史さん。貴重な原画や下絵、日記、秘蔵コレクションの他、絵本の中の長谷川家を再現したジオラマなどを展示して長谷川さんの絵本の魅力を紹介します。

©長谷川義史／絵本館、BL出版

9月～11月

高知県立文学館 開館20周年特別企画

文学館の文化祭

2017(平成29年) 9/23(土・祝)～11/12(日) 場所：企画展示室 観覧料：500円

2017年11月3日に開館20周年を迎える高知県立文学館。この節目の年に、所蔵しているお宝を一挙大公開。初公開の資料をはじめ貴重な資料を展示します。

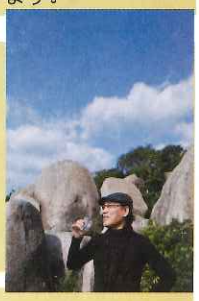
11月～1月

酒と文学展 ～『土佐日記』から吉田類まで～

2017(平成29年) 11/25(土)～2018(平成30年) 1/14(日) 場所：企画展示室 観覧料：500円

（※12月27日～1月1日は年末年始のため休館）

「二十歳の文学館」を記念し、吉田類さんをはじめとする高知の作家たちと酒にまつわる物語をご紹介します。酔いどれ文学の味わいをお楽しみください。



1月～3月

上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展

2018(平成30年) 1/27(土)～3/25(日) 場所：企画展示室 観覧料：500円

2014年に国際アンデルセン賞作家賞を受賞した上橋菜穂子さん。代表作〈精霊の守り人〉シリーズに描かれる多文化共生を軸として、その卓越した物語世界を紹介します。

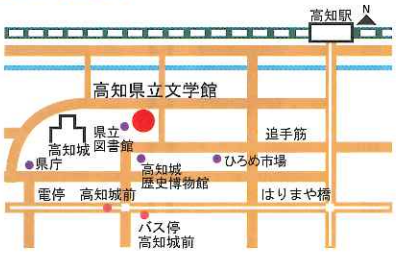
絵©佐竹美保
《サグとナユグ―混じり合う世界―》2016年

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般360円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail：bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bungaku.com

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「高知城前」下車、北へ徒歩5分または〈高知駅行〉「はりまや橋」下車、徒歩20分
●JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
●路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
●バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

フェイスブック好評配信中！
Facebook：https://www.facebook.com/kochi.literary.museum